
ライデン留学体験記

櫛川 舞 Leiden Institute of Chemistry, Faculty of Science, Leiden University

私は細胞科学研究財団より育成助成をいただき、オランダの南ホーランド州ライデンにあるライデン大学で2022年9月よりvisiting researcher (Assistant Professor/Guest) として1年間研究留学する機会をいただきました。そして、現在もオランダより本体験記を執筆しています。私の場合、2020年度に研究留学を予定していたのですが、COVID-19の影響により、十分な研究環境になる現地（オランダ）とスムーズな渡航許可の両国（オランダと日本）の状況を考慮しての出発になったため、約2年延期することになりました。当時の先の見えない状況では、1年1年が重要な研究者にとって出発時期の予定の立たない留学計画には不安要素が大きく、決まった時期にしか計画できない条件で海外留学を希望されている研究者の中には、せっかくの機会を中止せざるを得ない研究者もたくさんいらっしゃったと思います。しかしながら、私の場合、幸いにも2年延期後に出発することができ、周りの理解・サポートに本当に感謝しております。渡航後は、研究生活においてコロナの影響はほとんど受けない生活を送ることができています。飛行機・電車を使った国境を越える移動もすべて通常通りです。

ライデン大学はオランダ最古の大学で、日本語学科のある日本とゆかりのある大学です。



写真 1 ライデン大学の研究室がある研究棟正面エントランス
(2022年9月撮影)

ライデンは、長崎に医師として赴任したシーボルトが晩年日本研究に励んだ場所でもあります。日本人は少ないですが、日本に興味のある人が多く、街中や大学の施設の壁などのデザインに日本語の文字を多く見ることができます。ライデンは小さな町ですが、日本人に好意的な人が多い印象で、運河に面した美しい町

並み、大学生の街で治安もよく、自転車にさえ乗ることができれば、私は過ごしやすい街だと思います。(写真1、2)

私の所属しているAlexander Kros教授の主宰するLIC/SBC (Leiden Institute of Chemistry/Supramolecular & Biomat. Chem.) グループは、研究テーマによって4つのチームからなり約50名ほどのメンバーがいます。ポストク、大学院生の多い活気ある研究グループです。私はKros教授のチームの一員として、「がん細胞特異的なターゲティング製剤開発」をテーマに取り組んでおりますが、Biologyのグループと連携しゼブラフィッシュの疾患モデルを用いた実験にも取り組むことができます。



写真2 ライデンの川のある生活—自転車で通る毎日の通学路— (2022年9月撮影)

精密な装置は施設内で共用できる環境にあり、やりたい実験に必要な装置はすべて整っているという状況です。一方で、敷地を隣り合わせたライデン大学病院LUMC (Leiden University Medical Center) や他大学 (国内外) との連携も充実しており、もし、装置や手段が自分の研究施設にない場合でも、他の連携機関の研究者とのディスカッションや装置の貸し借りが容易に可能な環境です。特にこのKros教授とのディスカッションは、私が本当に興味のあることは何だろうかと改めて自分のやりたいことを見つめなおす機会でもあり、私のこれからの研究生活において最も重要な経験をさせていただいた気がいたします。

私はこの留学で3つの学びをさせていただいたように思います。①ディスカッションで重要なのは英語力ではない、②みんな同じ悩み、③体験しないとわからない、の3つです。①現在、研究室に日本人は私1人で、英語を学ぶ環境としてはベストだと自分に言い聞かせております。最も救われましたのは、研究室のみんなが私のつたない英語でも最後まで聞いてくれることでした。言いたいことが伝わったかどうかを心配する私に、みんなが言います、英語力は重要ではない、と。②私の過ごす研究室には、ヨーロッパを中心に、色々な国から来た大学院生がおり、育った環境が違っていても、生活や進路などについて同じような年齢で日本でもよく話題になる同様の悩みを抱えています。とても新鮮でした。どこも同じと知り、私はそこに安心感

を覚えました。③私の頼りない英会話も含め、オランダの寒すぎる冬の自転車通学など、初めての海外生活でスムーズにいかない苦労話もたくさんありますが、行く前から留学に対してポジティブな意見を持つ私でさえ、一つ一つに初めて知る驚きの体験をし、それらを振り返った時に「この生活をしなかったらわからなかったな」を感じました。これは言葉での正確な説明が難しいですが、異文化の中で生活することで「考え方の多様性を知る」ということかもしれません。物事には“自分が思う以上に”多くの見方があることを経験をもって知りました。

留学経験が必ずしもその人にとって必要であるわけではありませんが、もし留学をするかどうかを悩んでいる人がいればぜひおすすめしたいです。そして、留学する年齢も関係ないと感じました。私は何歳で留学するのがいいのか、留学は本当に必要だろうかなど、これまで考える時間が多かったものですから（笑）、留学の意味について考えることもありました。しかし、自身のその時の年齢ごとに興味、感じることは異なり、どの時点でも学ぶものはあり、それぞれの留学の目的は達成されるように思います。しかし、深く考えすぎてはいけない部分かもしれません。

1年のうち半分が冬と言われているオランダですが、やっと明るい暖かい「春」が5月頃やってきて急速に「夏」に移行している6月を今過ごしております。今、こちらはベストシーズンです。10月には一気に「冬」になるでしょう。季節としてはベストシーズンなまさに今をスローモーションで過ごしたい気持ちですが、素晴らしい季節はあっという間に過ぎてしまうから貴重なのでしょう。この今回の研究留学という時間にも限りある貴重な機会を最後まで大切に過ごしたいと思います。

末筆ではございますが、この研究留学の機会をいただきました細胞科学研究財団の関係者の方々、研究留学へのご理解、滞在中のサポートをいただきました福岡大学薬学部薬物送達学・創剤学の諸先生方、本助成に推薦していただいた順天堂大学の入村達郎教授をはじめ、諸先生方に深く感謝申し上げます。